

# 27PB-am128S

臨床分離された $\beta$ 溶血性レンサ球菌の分子疫学的特徴と薬剤耐性伝播

○佐伯 成美<sup>1</sup>, 輪島 丈明<sup>1</sup>, 瀬山 翔史<sup>1</sup>, 中南 秀将<sup>1</sup>, 野口 雅久<sup>1</sup> (<sup>1</sup>東京薬大薬・病原微生物)

【背景】 $\beta$ 溶血性レンサ球菌は、多彩な疾患を引き起こす。我々は、三次救急病院で分離された $\beta$ 溶血性レンサ球菌を収集し、その特徴の解析を行っている。今回は、 $\beta$ 溶血性レンサ球菌のうち、*Streptococcus pyogenes* および *Streptococcus dysgalactiae* subsp. *eqisimilis* (SDSE) について分子疫学的特徴および耐性株の動向を解析したので報告する。

【方法】2013年から2016年までに東京都内の大学病院で分離された $\beta$ 溶血性レンサ球菌590株のうち、*S. pyogenes* 77株、SDSE 96株を使用した。菌株は、*emm* 遺伝子の多型を解析し、型別した。最小発育阻止濃度 (MIC) は、微量液体希釈法で測定した。薬剤耐性機序は、薬剤耐性遺伝子を PCR で検出し推定した。また、寒天培地上で菌同士を接触させ耐性遺伝子の伝達の有無を検討した。

【結果・考察】*S. pyogenes* では喀痰、非開放膿由来株が16.9%、SDSEでは創部由来株が14.6%と最も多かった。*emm* 型別を行ったところ、*S. pyogenes* は *emm* 89 が29.9%で、SDSE は *stG* 6792 が27.1%と最も多かった。年度や *emm* 型と各種薬剤耐性率を解析したところ、*S. pyogenes* において2015年までは macrolide 耐性率が減少していたが、2016年でその割合は80%に増加していた。特に、当初耐性率が低かった *emm* 89 型株の多くが2016年では耐性を示した。一方で、SDSEでは macrolide 耐性率は調査期間を通じて10%程度であった。*S. pyogenes* からSDSEへの耐性伝達を検討したところ、*S. pyogenes* からSDSEに macrolide 耐性の伝達が認められた。*S. pyogenes* の株が macrolide 耐性を獲得したこと及び耐性遺伝子が *S. pyogenes* からSDSEに伝達し得ることから、macrolide 耐性株の流行に注視する必要があると考えられる。